

リサーチに基づいた自己表現アプローチ法を使った コミュニケーション能力向上の試み

Improving students communication skill through a research-based self-expression approach

大阪樟蔭女子大学非常勤講師 笠巻知子

1. はじめに

本研究は、大学一年生を対象としたリスニング・スピーキングの授業に、リサーチに基づく自己表現アプローチ法を導入した結果の報告である。小学校から大学まで一貫して「コミュニケーションとしての英語教育」が求められている。この解決方法として、いままでゲームやタスクといった手法でアウトプットの質を高める多くの研究がある (Harmer, 2003 ; Willis, 2003 ; 小野田, 2010 ; 高島, 2000 ; 田中, 2003)。この手法の問題点は、アウトプットの量が不十分になってしまう傾向があることが指摘されている。最近の研究によって、コミュニケーション能力を向上させるためにはアウトプットの量の重要性が指摘されてきた (伊東, 2008 ; 斎藤, 2008 ; 鳥飼, 2011)。そこで、本研究では、リサーチに基づいた自己表現アプローチ法によって、クラスルームの現場でアウトプットの量を効果的に増すことができるのかについて検証してみた。その結果、いくつかの新しい知見と一定の成果が得られたのでここに報告します。

2. 方法

2.1 調査対象

大阪市立大学1年生対象の全学共通の必修科目の授業において、2010年10月からの半期、2011年4月からの半期、合計193名に対してリサーチに基づく自己表現アプローチ法を実施した。

2.2 クラスルームでの指導方法

(1) プレゼンテーション

毎時間、時事問題を扱ったテキスト (山崎達郎ほか著 『What's on Japan』金星堂) のシリーズを用いて、事前に割り振った担当グループが、テキスト

から選んだトピックに関して、さらに自分たちでリサーチしたことを英語で各グループ2回ずつ発表した。持ち時間は、1人5分×人数分（1グループ4～6人）プラス質疑応答の時間とした。英語でプレゼンテーションを効果的に行うため、構成、表現、visual aidsの使い方に加え、実際に学生がプレゼンを行っているビデオを見せるなどして事前に指導した。

(2) ディスカッション

授業日より1週間前以内の英字新聞の中から、自分の興味、関心のある記事を選び、事前に記事の要約とそれに対する自分の意見を英語で書いて準備し、発表の際にはメモ程度にしか見ないことを前提とした。3～4人のグループで、一人1分間ずつ英語で発表し、その後、グループの中で記事の一つを選び、それについて英語でディスカッションを3分間行った。半期で計10回行った。

(3) 評価

① 学生自身による自己評価

授業最終日にクラスへの貢献度、英語の使用量、クラスで学んだこと、およびクラスへの感想を自己評価シートに記入させた。

② 教師による学生の評価

プレゼン終了直後に発表グループ全体にと、各メンバーにそれぞれコメントを与え、contentとdeliveryに関するevaluationの他に、評価をA,B,C,Dの4段階でつけて翌週に発表者に渡した。

ディスカッションに使用する記事の要約とコメントは毎回授業終了後に提出させ、自分の意見がしっかり書けているか、また十分な量があるかという2点に絞り、3段階で評価をつけて返却した。発表中は、教師がモニターし、クラス貢献度として評価をつけた。

③ 評価の共有

教師は、学生にevaluation sheetに書かれたcontentとdeliveryに関する各項目についてexcellent, average, poorの3段階による評価、良かった点と今後につながる改善点が書かれたfeedbackに加え、プレゼンの評価を渡し、グループ内で公表した。提出した記事の要約とコメントは、1～3点の3段階で評

価し、グループ内で公表した。

3. 結果と考察

(1) 学生のアウトプットの量が著しく向上した。

表1は、リサーチに基づいた自己表現アプローチ法（以下、自己表現法）の導入初期と終了時期の学生の能力を現している。この表で明らかのようにアウトプットの量が著しく向上しているのがわかる。

表1 学生の能力の変化

	導入初期	終了時期
1. プレゼン力	C	B
2. ディスカッション力	C	A
3. 意欲	C	B
4. クラス貢献度	C	A
5. 集中度	C	B
6. アウトプットの量	C	A

評価の基準：A: 100～80 B: 79～70 C: 69～60 D: 60以下

(2) コミュニケーションを阻害する因子の自然な減少

本研究の自己表現法の特徴は、英語コミュニケーションに対する不安や苦手意識を低減することを目的にしていることである。「完全主義をなくす」とか「失敗を恐れない」なども目的にしていることである。にもかかわらず、本研究で自己表現法を導入した結果、アウトプットの増加と同時に、これらコミュニケーションの阻害因子が減少していることがわかった。したがって、従来の手法は、結果論を目的にすることに傾きすぎていた可能性があることを指摘したい（表2）。

表2 学生の意識の変化

1. 語彙力不足に気付いた
2. 向上力：自分の言いたいことをもっと的確に英語で伝えたい
3. 苦手意識や不安が減少した
4. 英語力だけでなく、英語で話そうという積極性や意欲が大事だと気付いた

(3) 学生は、Self-expression と Speaking の違いを体得した。

自己表現法の導入によって、学生たちが、従来学んできた Speaking と自己

表現が同じ話す動作であるにもかかわらず、まったく違った感覚でつかんでいた。その結果、自己表現に“熱意”、“感情”が明確に加わっていることが観察された（表2）。

4. 今後の課題

本研究は、自己表現法を手探り状態で模索してきた経緯があった。アウトプットを増すと考えられる手法は、手当たり次第に試みた嫌いがあったかもしれない。その結果、導入当時は、一部の学生に戸惑いや混乱が認められた。今後は、自己表現法の評価項目をより絞り込み、アウトプット増加の可能性をより深く見極めていきたいと考えている。また、自己表現法の手法の一部を変えることによって、小学校からアウトプット量の増加の可能性がある。この視野に立った、小学校から大学までの一貫したコミュニケーション英語教育も考えて行きたい。

References

- Dave Willis and Jane Willis 2007. *Doing Task-based Teaching* Oxford University Press
- Jane Willis 著 青木昭六監訳 2003. 『タスクが開く新しい英語教育－英語教師のための実践ハンドブッカー』 開隆堂
- Jeremy Harmer 斎藤栄二他監訳 2003 『実践的英語教育の指導法－4技能から評価まで－』 ピアソン・エデュケーション
- 伊東治己 2008. 『アウトプット重視の英語授業』 教育出版
- 小野田栄 2010. 「コミュニカティブ・アプローチに基づく授業実践例」 in 『英語教育大系 第11巻 英語授業デザイン－学習空間づくりの教授法と実践』 大修館書店 p. 103－124
- 斎藤栄二 2008 『自己表現力をつける英語の授業』 三省堂
- 高島英幸 2000. 『実践的コミュニケーション能力のための英語のタスク活動と文法指導』 大修館書店
- 田中武夫・田中知聡 2003. 『「自己表現活動」を取り入れた英語授業』 大修館書店
- 鳥飼玖美子 2011. 『国際共通語としての英語』 講談社現代新書